

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月23日現在

機関番号：24601

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520022

研究課題名（和文） 看護倫理学の基礎づけとなるハイデガーの根源的倫理学についての研究

研究課題名（英文） A Study of Heidegger's Originary Ethics to lay the Foundation for Nursing Ethics

研究代表者

池辺 寧（IKEBE YASUSHI）

奈良県立医科大学・医学部・講師

研究者番号：00290437

研究成果の概要（和文）：

ハイデガーは存在の思索を通じて、人間は他者との共同存在であることを一貫して堅持している。このことを示すために本研究では、ハイデガーが論じている住むことには他者と共に住むことも含まれていること、存在の真理を問うことは倫理学が生まれてくる存在論的根源を問うことでもあることを明らかにした。さらに、人間にとっての痛みの意味についての研究を行い、痛みの完全な根絶は、他者との共同存在である人間の生そのものを否定することにつながることを論じた。

研究成果の概要（英文）：

In the thinking of Being, Heidegger holds consistently that man is being-with others. To prove this, I showed that the dwelling of man Heidegger discusses includes the dwelling with others and that the question concerning the truth of Being is also the question concerning the ontological origin of ethics. Furthermore, I studied why man suffers from pain and argued that the complete removal of pain leads to denying life of man who is being-with others.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：ハイデガー、住むこと、共同存在、根源的倫理学、エートス、人間の本質、痛み、看護倫理学

1. 研究開始当初の背景

ハイデガー全集の主要な巻が刊行され、近年、ハイデガーに対する見方が変わりつつある。特に共同性に対するハイデガーの関心が明らかになるにつれ、ハイデガーに倫理的な関心を見出そうとする動きが活発になって

いる。ところが、看護学研究者がハイデガー哲学を援用する際には、相変わらず従来のハイデガー理解にとどまったままである。しかも、ハイデガーが西洋の哲学的な伝統のなかで思索していることを考慮せず、彼の哲学を自らの主張の補強のために一面的に援用し

ている場合も少なくない。研究者の関心に応じてどのようにでも読めると言えばそれまでだが、やはり自らの問題意識とハイデガーのそれとの異同を正確に見極めたうえで、独自の見解を提示していく必要がある。

看護学研究者にハイデガー哲学を援用した研究を行っている人は見受けられるが、ハイデガー哲学の研究に従事する哲学・倫理学研究者の手による、彼の哲学を看護倫理学や看護理論へと応用しようとした研究はあまり見当たらない。本研究はハイデガー研究者の側から、最近の研究動向を踏まえつつ、ハイデガーの哲学が看護倫理学の思想的基盤になりうることを示すものである。

2. 研究の目的

ハイデガーが根源的倫理学という語を用いていることはよく知られている。だが、その内実は必ずしも明瞭ではない。ハイデガーは倫理学という伝統的な学問的枠組みを拒絶し、倫理学を主題にした論述に取り組むことがなかったからである。それゆえ、ハイデガーに対してこれまで、倫理的な次元の欠如がしばしば指摘されてきた。たしかに、彼が展開している存在の思索は、他者との共存を考慮に入れているとは言い難い面もある。しかし、ハイデガーが述べる自己性や本来性は他者性を媒介としたものであり、決して他者を軽視していない。

本研究の目的は、ハイデガーは存在の思索を通じて、人間が他者との共同存在であることを一貫して堅持していたこと、根源的倫理学という語はそれを端的に言い表した語であること、これらのことを示すことにある。手がかりとなるのは「住むこと」という語である。本研究ではハイデガーは住むことを通じて、自らの倫理的な問題意識を提示していることを明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 倫理学の語源はエートスであるが、ハイデガーはエートスの根源的語義を住むことに見出している。ハイデガーが根源的倫理学をどのように捉えていたかを明らかにしていくうえで手がかりとなるのは、住むことの問題である。ハイデガーが住むことについて主題的に扱っているのは、論文「建てること・住むこと・考えること」においてである。この論文を中心にして研究を進めていくが、その際、他者と共に住むことという観点から、住むことについて論じることにする。

(2) 根源的倫理学という語は、ハイデガーの『ヒューマニズムについての書簡』に由来する。1944年夏学期講義録には、この書簡の原型といえる箇所があり、ハイデガーはそのなかで、人間はエートスに規定されていると

論じている。上記の書簡や講義録を手がかりにして、ハイデガーは存在についての思索を通じて、倫理学に一貫して関心があったことを明らかにする。

(3) 研究代表者は今回の科学研究費補助金の交付を受ける直前に、ハイデガーを手がかりにして痛みの本質を考える研究を行い、「ハイデガーと痛みの問題」と題した論文を『シェーラー研究』（シェーラー研究会）第2号に公表している（2009年3月）。この論文では、痛みは人間存在に深く関わる現象であり、人間は痛みを互いにもつがゆえに互いに支えあうことができるとハイデガーが考えていたことを示した。上記の論文のなかで論じた、痛みに関するハイデガーの思索を基底に据え、モリス、レヴィナス、フランク、ヴァイツゼッカーなどの文献も参照しながら人間にとっての痛みの意味や医療の役割について考察する。

4. 研究成果

(1) ハンは、ハイデガーが論じている住むことには間人格的次元が欠如していると指摘している。たしかにハイデガーが人間を住んでいる者と捉えるとき、彼がまず念頭に置いているのは四方域において物のもとで滞在している人間であって、他者と共に住んでいる人間ではない。他者と共に住むことに重点を置けば、ハンが指摘したように、住むことの根本動向として「愛すること」を挙げることができるかもしれない。だが、ハイデガーの思索から、そのような主張を引き出すことはできない。ハンは、死すべき者の住むことはハイデガーにとっては共に住むことではないと批判する。だが、本研究ではハンのこのような批判に異議を唱えた。

ハイデガーにとって、人間とは「他者へと移入された存在」であり、「他者との共同存在」である。他者と共にあること以外のあり方では、人間は存在しえない。人間は相互共同性のなかで存在するのであり、個人としての自覚もこのなかで生まれる。相互共同性は他者と共に住むことによって生じる。そうであるかぎり、ハイデガー自身は住むことを「人間の相互共同性に属しつつ」と述べるにとどまったが、グッツォーニのように、「われわれが相互共同的に住むことは、われわれがそのつどある他者とともに、より一般的に言えば、他者とともに世界のうちに存在することを意味する。私の世界はそのつど、われわれの世界であり、共有された世界である」と敷衍できるであろう。

ハイデガーは住むことを「大地と天の間、誕生と死の間、喜びと痛みの間、仕事と言葉の間、これらの間に人間が滞在すること」と捉え、このような「多様な間」を世界と名づ

けた。住むことは、多様な間である世界において繰り広げられる人間の生活全体を指すが、そこには他者との関わり合いも当然含まれる。世界には、様々な間が幾重にも交錯している。ハイデガーが挙げたもの以外にも、様々な間、とりわけ人と人之間が考えられる。グッツォーニが挙げた例を借りれば、「昼と夜の間、女性的なものと男性的なものの間、子どもであることと大人であることの間、健康と病気の間、孤独と連帯の間」などを様々な間の具体例として付け加えることができる。これらの間を付け加えることによって、他者との関わり合いがなければ、世界は存在しえないことがいっそう明瞭になるだろう。ハイデガーは「死すべき者が住む家」を世界とみなしているが、世界は、死すべき者が共に住む「われわれの世界」である。われわれは「世界という家」に、他者と共に住んでいるのである。

死すべき者をいたわることは「よき死」であろうとすることである。ハンは、死すべき者をいたわることは各々が自己自身をいたわることであって、「よき死」に他者は無関係であると捉え、ハイデガーは「よき死」の間人格的次元を考慮していないと解釈する。たしかにハイデガーは『存在と時間』において、「死という没交渉性は現存在を自己自身へと単独化する」と語っている。死においては、他との一切の関係が断たれる。その点を強調すれば、死すべき者としての人間は孤独な存在である。ハイデガーの思索において、「単独化」は重要な術語である。しかし、単独化を重視しているからといって、ハイデガーは他者との関係を無視しているわけではない。むしろ彼は、単独化され自己自身へ投げ返されることによって、他者との本来的な関係がはじめて生まれると考えている。他者は死すべき者という運命を同じくする同志として、絶対に欠かせない存在である。このように捉えるかぎり、死すべき者をいたわり合うことである。住むことの根本動向としてのいたわることには、他者も含まれる。

本研究では以上のように、他者と共に住むことはハイデガーにとっても、住むことの根本動向の一側面であることを明らかにした。ハイデガーにおける住むことの問題はこれまでも様々な観点から論じられているが、他者と共に住むという観点から論じた点に本研究の独自性がある。

(2) ハイデガーはエートスを、人間が全体としての存在者の真只中でとっている態度を言い表した語であると捉え、住まい・住むことをエートスの根源的な語義とみなす。エートスは人間が行う振る舞いの一つではなく、人間のあり方そのものである。一方、ロ

ゴスは住むこととしてのエートスのうえで展開される諸々の振る舞いの一つである。ロゴスもたしかにあらゆる存在者と関係しうるが、このことが可能になるのは、ロゴスがエートスに属しているからである。ところが、西洋の歴史においてはこれまでもつばらロゴスのほうが着目され、「人間はロゴスをもつ動物である」と規定されてきた。もちろん、ロゴスをもつことも人間の本質である。ロゴスをもつか否かが、人間と他の動物の決定的相違であることにはちがいない。しかし、人間はエートスによって規定されており、ロゴスもまたエートスに属している。そこでハイデガーは、「人間はエートスをもつ動物である」と定義する。

「エートスをもつ動物」という定義は、倫理学について主題的に論じることがなかったハイデガーが、人間を際立たせる、人間の最も固有な本質をエートスに見出している点で大変興味深い。だが、「エートスをもつ動物」という定義は人間を「～をもつ動物」とみなしているかぎり、人間を動物性から考える「人間の形而上学的本質規定」になっていると言わざるをえない。もっとも、この定義はエートスとロゴスの関係を明瞭にするために、「ロゴスをもつ動物」という従来の定義との対比から便宜的に提起されたにすぎない。ハイデガーは従来の定義を否定し、「エートスをもつ動物」という定義を新たに提唱したわけではない。彼の意図は、ロゴスが優位を占めてきた西洋の歴史を批判し、エートスのほうが根源的であることを強調することにある。

ハイデガーは『ヒューマニズム書簡』のなかで従来のヒューマニズムを批判しているが、そこにおいて問題になっているのは人間本質と存在の関係である。ハイデガーが言うように、「人間は存在者の主人ではない」。しかし、脱一存しつつ存在の真理を見護るという点においては、人間は他の動物とは本質的に異なっている。そこでハイデガーは人間を「存在の牧人」と特徴づける。人間の尊厳は、人間が「存在の牧人」である点にある。ハイデガーの場合、人間の人間性を問うことは存在の真理を問うことにほかならない。その点において、従来のヒューマニズムは批判される。一方、彼自身は存在の真理を問うなかで、人間を「存在の牧人」、あるいは存在の近くに住む「存在の隣人」とみなす。そのかぎり、人間は存在者の中心そのものではないにしても、中心にいる。そこでハイデガーは人間を「中心を外れたもの」と呼ぶ。ハイデガーは、存在へと脱一存している人間を「存在の牧人」「存在の隣人」「中心を外れたもの」と捉えるが、その点においても彼の問題意識は、人間はいかに住んでいるか、つまり、エートスの問題にあるといえる。

存在者の中心ではない人間はエートス、すなわち、住むことによって規定されている。人間がある場所に滞在すれば、一定の拘束が自ずと生じてくる。エートスはつねに、ある一定の拘束性と関連している。ハイデガーが挙げている拘束性は、社会生活を送るうえで必要になる法律や道德規範などではなく、存在そのものから生じてくる、「人間にとっては法律や規則にならざるをえない諸々の指令の割り当て」である。彼が問うているのは、いかなる法律や道德規範が必要なのかではなく、それらを必要とする人間の本質である。ハイデガーは存在の真理を問うたが、存在の真理を問うこと自体が彼にしてみれば倫理学である。ハイデガーは人間本質と存在の関係を問題にするなかで、倫理学をすでに書いているのである。もちろん、ここで言う倫理学とは、規範や価値などを主題とした伝統的な倫理学ではなく、倫理学が生まれてくる「存在論的根源」としての倫理学である。それをハイデガーは「根源的倫理学」と名づけた。根源的倫理学の主題は存在の真理を問うことであるとともに、人間の本質的な滞在、すなわち、エートスを存在のほうから、かつ、存在に向けて規定することである。

本研究では以上のように、ハイデガーは存在を人間の本質との連関のなかで考えているゆえ、存在の真理を問うことは人間の本質としてのエートス、言い換えれば、倫理学が生まれてくる根源を問うことでもあることを明らかにした。

(3) 痛みはきわめて私秘的である。痛みを感じていることを自ら表出しないかぎり、誰も私の痛み気づいてくれない。また表出したところで、私がどれほどの痛みを感じているのか、他者は正確に理解できない。痛みを的確に伝える言葉は誰も持っていない。しかし、語る言葉がないからといって沈黙すれば、われわれは痛みのなかでさらに孤立してしまう。孤立すれば、痛みはますます増大していく。そうなると、他者との意思疎通がいつそう困難となっていく。しかし、痛みのなかで孤独であればあるほど、他者との関わりを求めるのが人間の常である。痛みの問題は痛みを感じている者だけの問題ではない。痛みは人を孤立させるだけでなく、同時に他者へとつながる通路を開くものである。その契機の一つとして、痛みを耐えかねて発するうめき声を挙げることができる。

われわれは、他の人間が発するうめき声を平然と聞いていられない。うめき声は、特定の誰かに向けて発したのではなく思わず口に出たものであっても、レヴィナスが言うように、「援助、治療による助け、別の自我による助けを求める原初的な訴え」となるものである。痛みを苦しむことそれ自体に意味

は見出せず、無用だとしても、苦しむことが私への呼びかけとなり、うめき声を聞いた私が苦しみに応答することで、痛みは意味あるものになる。うめき声を発しながら鎮痛を訴える他者の痛みは、私にとって許容できないものである。他者の痛みは正当化できない。もし正当化し、私の痛みだけを不当とみなせば、私と他者のあいだには、間一人間的な、言い換えれば、倫理的な関係はもはや存立しえない。そこでレヴィナスは、「隣人の痛みの正当化はまぎれもなく、あらゆる不道德の源泉である」とみなす。彼によれば、他者の訴えに応答し、他者の正当化できない痛みのために苦しむことで、私は私の痛みを受け入れることができる。他者の痛みのために苦しむことによって、「間一人間的なもの」という倫理的な観点が開かれ、私の痛みもまた意味を得ようになる。痛みそれ自体は無用、無意味であるにしても、私はうめき声を発する者に無関心でいられない。このことから、痛みは痛みを苦しむ者と私のあいだに、私が負う責任という間一人間的な観点に立脚した関係を構築するといえる。

痛みの除去・緩和は、人間らしい生活を維持していくうえで絶対に必要である。痛みの除去・緩和は万人の願いであり、その願いを叶えることは医療が担う重要な役割である。だが、その一方で、痛みは人間の生に不可欠な構成要素である。痛みは人を孤立させる一方で、他者との結びつきを強固にする。痛みは、人間の生が他者とともにあることを顧みる契機となるものである。痛みは身体の異常を感知する必須の感覚であるだけでなく、人間が生きていくうえで欠くことのできない経験である。したがって、痛みの完全な根絶は、他者との共同存在である人間の生そのものを否定することにつながる。痛みの意味が問われるゆえんは、痛みが有する、このような両義性にある。しかも、この両義性が痛みの意味の確定を困難にしている。痛みが必要とされるのは、意味を見出すことができれば、痛みを苦しむ状態にあっても痛みを苦しむ生を肯定することができるようになるからである。生の肯定は、痛みを苦しむ者がただ一人で行うことではなく、その人を取り巻く人間関係のなかで行われるものである。痛みを取り除くことだけでなく、生の肯定を支援していくことも医療に求められる役割である。

看護倫理学や医療倫理学の分野では、緩和ケアとの関連で痛みの問題が論じられることはあっても、人間にとって痛みがもつ意味とは何かという視点から痛みが取り上げられることはあまりない。それに対して、本研究では以上のように人間は何のために痛みを苦しむのかについての考察を行い、痛みの完全な根絶は他者との共同存在である人間

の生そのものを否定することにつながることを論じた。なお、痛みについての研究は直接にはハイデガー哲学を主題にしたものではないが、「3. 研究の方法」で記したように、痛みに関するハイデガーの思索を基底に据えている。

(4) 研究期間内に実施した一連の研究を通じて、ハイデガーが言う根源的倫理学や住むことについては、一定の研究成果を挙げることはできた。だが、ハイデガーの根源的倫理学に関する研究に重点を置いたため、ハイデガー哲学に基づいて看護倫理学を基礎づけていく試みについては十分な研究成果を提示できなかった。研究代表者の今後の課題としたい。ただ、ハイデガー哲学の応用編ともいえる痛みについての研究を行うことにより、ハイデガー哲学を医療の問題に関連づけていく一定の方向性を示すことはできたと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 池辺寧「痛みの意味と医療」、『医療と倫理』(日本医学哲学・倫理学会関東支部)、査読有、第9号、掲載確定、刊行年未定。
- ② 池辺寧「ハイデガーの根源的倫理学—人間の本質としてのエートス—」、『奈良県立医科大学医学部看護学科紀要』、査読無、第8号、2012年、23—30頁。
- ③ 池辺寧「死を考える—よりよく生きるために—」、『介護福祉研究』(岡山県介護福祉研究会)、査読有、第19巻第1号、2012年、57—61頁。
- ④ 池辺寧「ハイデガーと住むことの問題—共に住む者としての人間—」、『哲学』(広島哲学会)、査読有、第63集、2011年、103—116頁。

[学会発表] (計4件)

- ① 池辺寧「ハイデガーの根源的倫理学—『ヒューマニズム書簡』再考—」、第44回広島倫理学会、2011年8月17日、せとうち児島ホテル。
- ② 池辺寧「人間存在と住むこと—後期ハイデガーを手がかりにして—」、広島倫理思想史学会第76回大会、2010年11月7日、鈴峯女子短期大学。
- ③ 池辺寧「ハイデガーにおける住むことの問題」、第43回広島倫理学会、2010年8月18日、広島市文化交流会館。
- ④ 池辺寧「痛みの意味について」、第60回広島哲学会大会、2009年11月7日、広島大学。

[図書] (計2件)

- ① 池辺寧 (共著)『看護学生のための医療倫理』、丸善出版、2012年、48—59頁、66—71頁、74—75頁、82—83頁、102—103頁。
- ② 池辺寧 (共著)『薬学生のための医療倫理』、丸善、2010年、44—55頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

池辺 寧 (IKEBE YASUSHI)
奈良県立医科大学・医学部・講師
研究者番号：00290437

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし